

(同外科)

江口 礼紀・西川 正夫・上原 健一・  
河井 文健・小川 一平・上谷潤一郎・  
佐藤 正典・間 浩明・片田 雅孝・  
竹入 正彦

症例：58歳女性。主訴は腹痛、嘔吐。家族歴では弟に肝癌。既往歴ではS. 38年にITPにて脾摘し輸血施行。現病歴はS. 59年より慢性肝炎にて通院中であったが、S. 60年7月27日夕、突然上腹部激痛出現した為入院。入院時腹部に圧痛と波動を触れ貧血を認めた。HBs Ag (-), HBc Ab (-), AFP>40ng/ml, トランスアミナーゼ上昇をみた。Echo, CT, Angiography, 腹水穿刺にて血性腹水と網膜内出血と診断し開腹した。開腹にて尾状葉に径4cmの腫瘍と出血点を認め、肝切除術施行した。索状型、Edmondson II型の肝細胞癌の破裂で非癌部は肝硬変だった。術後5ヵ月現在、AFP 52ng/ml, 転移なく、経過観察中である。

## 20. 典型的なアルコール硝子体のみられた1症例

(長汐病院内科) 本池 洋二・塚田 悦男  
(東京女子医大消化器病センター内科)  
小幡 裕・久満 董樹

54歳男子の大酒家にみられたアルコール性肝炎の死後肝生検標本より、本邦では比較的稀れといわれているアルコール硝子体を光顕と電顕にて多数見出した。

アルコール硝子体は現在ではアルコール性障害以外の種々の疾患にも観察されており、アルコール肝に特異的なものとはいいがたいが、その起源、病因的意義には諸説がある。たとえばde Novo説、intermediate filament説であるが、塚田らはその形成には細胞の機能的失調が重要で変性粗面小胞体との関連性を強調している。また病因的にはpreneoplasiaの面よりも検討されており、いまだ多くの興味を持たれている。今回、アルコール硝子体の解明への貴重な1症例と考え報告した。

## 21. 合成DNAを用いたras点突然変異のスクリーニング

(国立がんセンター生物学部)  
長原 光・野口 茂・西村 暹  
(東京女子医大消化器病センター内科)  
小幡 裕

ras oncogeneの活性化を臨床例で検討した。プローブとしてras遺伝子の第12番目、61番目が正常及び点

突然変異を伴う19merの合成DNAを使用した。肝癌17例肝癌の非癌部組織19例胃癌15例について検討したところ、胃癌1例で正常のras遺伝子の増幅が認められた。これは、点突然変異を伴わず正常の遺伝子が増幅しても癌を引きおこし得る可能性を示す興味ある例である。今後、正常ras遺伝子の増幅に伴いmRNA及びP21(ras product)が増加しているのか検討する予定である。突然変異をもつ合成DNAをプローブにした場合、現在1例も変異を有する症例はみつかっていない。

## 22. 甲状腺腫瘍の超音波診断

—手術例105例を中心として—  
(社会保険山梨病院)

新井田正枝・草野 佐・小沢 俊総・  
久米川 啓・山下由起子・松山 秀樹・  
飯田 龍一・小俣 好作・井口 孝伯

社会保険山梨病院では、昭和58年より成人病検診及人間ドックを受診した全例を対象に、スクリーニングとして、5MHzのプローブを用い、直接接触法にて、甲状腺の超音波検査を施行した。この結果、甲状腺の限局性病変が多数発見され、穿刺細胞診により、受診者全体の0.64%に、更に女性においては1.13%が悪性と診断された。エコー像で、内部不均一な像を呈し、砂粒状及石灰化像を有する境界の不明瞭なものに、悪性の多いことが判明した。昭和60年12月までの手術例は105例にのぼるが検診により発見された潜在小型甲状腺癌の手術適応について、今後、より検討が必要である。

## 23. 第3世代の内視鏡・電子スコープとその性能—自験例870例を中心として—

(東京女子医科大学第二病院中検)  
長谷川みち代・妹尾 文恵・片山 修・  
藤林真理子・矢川 裕一・市岡 四象

われわれは、1985年3月よりWelch Allyn社製Video Endoscopeを用いて、上部消化管内視鏡検査を行ってきた。この使用経験から、本器種の性能とその有用性について検討したので報告する。従来のスコープに較べやや径が太く、また先端硬性部が長いため、操作性にはまだ改良すべき点もあるが、この電子スコープの特徴として、1. イメージファイバーを通さず直接消化管内を観察できる。2. スコープの挿入開始から抜去まで連続的に画像をモニターテレビおよびVTRに記録できる。3. 随時画像を静止させ、ス